

# 主の日と週日 キリスト者と社会生活

2007 年度第一回教会勉強会

日本キリスト改革派松戸小金原教会 牧師 関口 康

はじめに

今日の発題は、「信仰と生活」というテーマのもとで今年度中に三回行うことを予定している教会勉強会全体の基調講演としての位置づけと性格を持っています。これからお話ししますことは、わたしも日本キリスト改革派教会が創立以来立脚してきた「改革派神学」の立場から見て、主の日と週日の関係は何かを説明してみるといふ点に尽きます。

## 1、「主の日」の定義

この発題において「主の日」(The Lord's Day)とは、教会の礼拝が行われる日曜日の生活全体を象徴的に述べたものです。他方、「週日」(Weekdays)とは、わたしもがそれぞれの家庭や職場や地域社会の中で過ごす生活全般を言い表したものです。いずれも、あまり厳密な言い方ではなく、ごく大雑把に括ってみたものです。

これよりもはるかに厳密な定義は、ウェストミンスター信仰告白の中にあります。

「一般的に、正当な割合の時間を神礼拝のために聖別するということが自然の法則であるように、神は、み言葉において、すべての時代の人に義務を負わせる成文的・道徳的・永久的な命令によって、安息日のために七日のうち一日を特に定めて、神に対しよく守るようになされた。それは世の初めからキリストの復活までは週の終りの日であったが、キリストの復活以後は週の初めの日に変わった。これは、聖書で主の日と呼ばれ、キリスト教安息日として世の終わりまで継続されねばならない」(21・7)。

わたしも日本キリスト改革派教会は、ウェストミンスター信仰告白を教会憲法として受け入れています。そのため、「主の日」が日曜日であるという点は全く動かしがたい事柄であると考えております。たとえば、わたしもは、「日曜日にこそ会社や地域社会で仕事をしなければならない人々のことはどうなのか」とか「教会のほうが譲歩すべきであって、日曜日以外に礼拝を行う可能性を探るべきではないのか」という真摯な問いかけがあることを全く知らずにいるわけではありません。しかし問いかけてくださる方々にとって満足

していただけるような答えを出すことは、できそうもありません。

日曜日以外に礼拝を行えば、出席者が増えるでしょうか。曜日を動かせば、問題は解決するでしょうか。他の曜日に変えると今度はその曜日に都合が悪い人々が出席できません。代々の教会が、まさに「キリストの復活から世の終わりまで」、週の初めの日（日曜日！）を「主の日」と定めて重んじてきた伝統を、われわれの時代の都合や弱さによって変えてしまうことは無理な話なのです。

## 2、「週日」の定義？

それでは、他方の「週日」の定義はウェストminster信仰告白の中にあるでしょうか。探してみましたが、わたしには見つけることができませんでした。しかし、強いて言えばここかもしれないと思われたのが、先ほど引用した 21・7 に続く 21・8 です。以下のように書かれています。

「それで、この安息日は、人々が自分の心を正当に準備し、その日常の用務をあらかじめ整理したのち、この世の職業や娯楽についての自分の働き・言葉・思いから離れて、まる一日きよい休息を守るのみでなく、神礼拝の公的私的営みと、やむをえない義務と慈善の義務とに、全時間従事するとき、主に対してきよく守られる。」(21・8)

「週日」という字は、出てきません。しかし、いわば言外ないし行間に、「週日」とは何かということが語られている、と読むことが可能です。ここで語られていることは、「キリスト教安息日」としての日曜日は、「人々が・・・その日常の用務をあらかじめ整理したのち」に訪れるものであり、かつ「この世の職業や娯楽についての自分の働き・言葉・思いから離れて」守られるものであるということです。

ということは、逆に言い直せば、「週日」とは何かが分かると言えます。「週日」とは、言うならば、日曜日にはこの世の職業や娯楽についての雑念的な事柄にわずらわされないように日常の用務をあらかじめ整理するための期間である、ということになるでしょう。

そのことを、もっと端的に言えば、次のようにも表現できるはずですが。

主の日の営みこそが、われわれの人生の目的・目標である。

それに対して、週日の営みは、主の日に安心しうるための準備的な通過点にすぎないと。

## 3、逆転発想の可能性

わたし自身には、今申し上げたことを、ただ否定的にだけとらえるつもりはありません。

ある面では全くそのとおりであると同意しています。ただし、です。週日を主の日のための準備的通過点ととらえるだけならば、きわめて一面的であり、われわれの人生を危険にさらす思想であると言わざるをえないとも考えております。一年は 365 日もあるのです。そのうち「主の日」は 52 日。他の日々は本当にただの準備的通過点にすぎないのでしょうか。そのように考えながら地に足のついた毎日を送ることができるのでしょうか。現実的な諸問題に対して本気で向き合えるのでしょうか。むしろ、真に重要なのは、われわれの人生の 7 分の 6 を占める「週日」のほうではないのでしょうか。「週日」の営みの中で主なる神の御心になつた正しい生き方を貫くためにこそ「主の日」があると語ることに、すなわち、「週日」のほうこそが目的であり、「主の日」は、いわば週日にとっての準備的通過点でもあるというふうに逆転させて考えてみることも、十分に可能ではないでしょうか。

そのような意味で「週日」を重視することは“改革派的ではない”でしょうか。決してそうではありませんというのが、この発題の結論です。旧約聖書からは四千年、新約聖書からは二千年、十六世紀宗教改革からは五百年近い歴史を有する改革派神学は、(キリスト教)安息日としての「主の日」と全く同じ重さをもって「週日」を重んじてきました。

たとえば、わたしども日本キリスト改革派教会の創立宣言(1946年)には、二つの強調点があるのですが、その第一に挙げられているのが、「キリスト教有神的人生観・世界観」ということです。その意味を一言しますと、要するに、われわれの全人生・全世界は全能の神の全き支配下にあるということです。そのようなものとしてわれわれの全人生・全世界を観るべきであるということです。

それは「主の日」だけが神の支配下にあるわけではないということをも当然意味しています。日本キリスト改革派教会は、創立以来、主の日の生活(教会において過ごす一日)だけではなく週日の生活(世間において過ごす毎日)もまた、等しく重要なものとして、重んじてきたのです。

#### 4、特別恩恵と一般恩恵

この点はまた、日本キリスト改革派教会の創立者たちに最も強く影響を与えたオランダの改革派神学者であり、牧師・大学創設者・教授・新聞記者、また政権与党の党首として総理大臣経験者でもあるアブラハム・カイパー(1837~1920年)が主著『カルヴィニズム』などにおいて強調してやまなかつた論点であることも、よく知られています。カイパーは次のように書いています。

「カルヴィニズムは、ここでも自らを神のみ前に立たしめ、人が神に似せて創られたものであるが故に、これを尊敬するだけではなく、世界もまた神が創り給うたものと

して尊重し、そこに特別恩恵と一般恩恵という真理をうち立てました。特別恩恵とは救いの恩恵であり、一般恩恵とは神が此の世を支持し、これに着せられた呪いをゆるめ、墮落の進行を阻止し、こうして神を創造主として崇める生活に至る道への、妨げられることのない発展を許すところの恩恵であります。かくして教会は信徒の共同体としての姿を回復し、一方において此の世の生活は、あらゆる分野において、教会の支配から解放されて神の支配のうちに営まれるのです。ここに家庭生活は、その独立を再現し、商業は自由のうちにその力を実現し、芸術と科学とは、あらゆる教会的きずなを脱して固有の靈感を回復し、人類はパラダイスにおいて与えられた、『彼等を治めよ』との神の戒めの如く、万物が聖なる義務としてそこに潜在する力と富とをもって、創造主である神に服従することを会得し始めるのです」

(A.カイパー『カルヴィニズム』鈴木好行訳、聖山社、1989年、55～56ページ)

この引用文中、特に注目していただきたいのが、「特別恩恵」と「一般恩恵」という言葉です。この引用文だけでは正確な意味が分かりませんが、ごく大まかに言えば、カイパーにとって「特別恩恵」とは要するに、教会の(壁の)内側のみに働き、キリスト者のみに有効である(創造者なる)神の恩恵であるのに対し、「一般恩恵」とは教会の(壁の)外側にこそ働き、キリスト者以外の人々にも有効である(創造者なる)神の恩恵であるというふうに一応整理できるものです。

また、この特別恩恵と一般恩恵の区別そのものは、カイパーが発明したものではなく、古くは宗教改革者カルヴァンにも、すでに見られる思想です。改革派教会の伝統的な立場であると言ってよいでしょう。

## 5、問題点

ただし、です。この特別恩恵と一般恩恵の区別、特にこのような(「特別」とか「一般」というような)言葉遣いは、間違っているとは言い切れませんが、今日ではいろんな意味で注意深く語る必要があるものとなっています。教会の内側にいるキリスト者はいつでも「特別」扱いであるが、教会の外側にいる人々は「一般」と呼び、俗世間の側に立つその他大勢の“一般人”とみなして、軽くないし低く扱うというような感覚は、キリスト者をこの世界の中にあってひどく不遜なものにしかねません。

また、そのような感覚は結局のところ、カイパーがそこから解放されたいと願っていたヨーロッパ中世の教会支配国家体制の教権主義の残滓(ざんし=のこりかす)に過ぎない、と判断されても仕方がないものです。

わたしたちが、主なる神を愛し、救い主イエス・キリストを愛し、教会を愛し、主の日

ごとの礼拝を愛することにおいて、神御自身から特別な恩恵を授かっている、と確信することについては、何一つ遠慮することはありません。

しかし、そのことと、現時点でキリスト者でない人々、信仰告白へと導かれていない人々をみくだしたり、差別したり、まして毛嫌いするようなこととは、全く異なることです。そのような態度は、主イエスが最もお嫌いになった、あのファリサイ派的な不遜に通じるものです。この点は、改めて強調するまでもない、当然のことです。

## 6、一つの神学論争

今の点に深い次元に関連してくる問題を、最後にご紹介いたします。数年前のことですが、オランダ人のメールフレンド(男性)から、とても面白い話を教えていただきました。二人のオランダ人改革派神学者の間に、一つの論争が起こった、という話です。

論題は「じゃがいもの皮をむくこと」と「教会で神を讃美すること」とでは、どちらがより重要か、というものでした。一方の論者はW.H.フェレーマ、もう一人はA.A.ファン・ルーラーでした。二人ともオランダでは非常に有名で、人気のある神学者です。

フェレーマは、なかば当然のように後者を選択しました。しかし、ファン・ルーラーは、次のように答えたそうです。

「たしかにそのとおりです。しかし、もしあなたが食事の準備を済ませ、神が繰り返し与えてくださる美味しい料理を十分に楽しむために着席するならば、おそらく神はあなたが神の御前で歌うために教会の中に着席することよりも、もっと素晴らしいことであると、ご覧になるでしょう！」

皆さんならば、どちらをお選びになるのでしょうか。フェレーマの選択は、間違っているわけではないどころか、教会の立場を最大限に重んじているという意味で、非常に正論であるということは、間違いありません。しかし、です。ファン・ルーラーの言っていることは間違っているのでしょうか。わたしには、そうは思えません。

わたしは、ファン・ルーラーがこのことをふざけて言っているのではなく、大真面目な神学議論として述べているという点が重要であると思います。ファン・ルーラーが主張しようとしていることは、日常生活を馬鹿にするなということなのです。じゃがいもの皮をむくときも喜びと誇りをもって行いなさい、ということです。これこそが、わたしども日本キリスト改革派教会の目指してきた「キリスト教有神的人生観・世界観」の心髄である、と感じるのは、わたしだけでしょうか。

また、フェレーマも、ファン・ルーラーも、れっきとした“改革派の”神学者であるということも重要です。どちらの意見も重んじられるのが、改革派教会なのです。

(2007年3月18日、日本キリスト改革派松戸小金原教会)